

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 31 日現在

機関番号：33703

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19791643

研究課題名（和文）授乳行為の背景因子 ―卒乳にむけての支援―

研究課題名（英文）A study of the background factor during the lactation period
-The support for the natural weaning-

研究代表者

岩田 幸子（IWATA SACHIKO）

朝日大学・歯学部・助教

研究者番号：60319126

研究成果の概要（和文）：授乳行為の背景因子 ―卒乳にむけての支援―

研究成果の概要（英文）：A study of the background factor during the lactation period
-The support for the natural weaning-

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
19 年度	1,300,000	0	1,300,000
20 年度	800,000	240,000	1,040,000
21 年度	800,000	240,000	1,040,000
22 年度	200,000	60,000	260,000
年度			
総 計	3,100,000	540,000	3,640,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：歯学・社会系歯学

キーワード：授乳、母乳、哺乳ビン、卒乳、社会的支援

1. 研究開始当初の背景

ヒトが哺乳類に属している以上、乳児に乳を飲ませて育てる（授乳）ことは当然のことである。この授乳行為には母乳と人工乳、またその混合で育てる方法があり、母乳は母親のおっぱいを含ませて飲ませ、人工乳は哺乳ビンを使って飲ませる。ヒトが育っていく上で必要不可欠な授乳行為は、通常、第一乳臼歯が萌出し噛み合い、咀嚼が獲得される生後1歳6か月児には必要ないとされる。しかし、1歳6か月児歯科健康診査において、授乳行為を継続している母子は多く、従来から「母乳」や「哺乳ビン」は1歳6か月のう蝕発生

要因として指摘されている。私は2000年より、乳歯う蝕と母親の育児不安の関連性を検討するため調査を実施してきた。2004年から2006年にかけては、1歳6か月児から3歳児への追跡調査を実施し、1歳6か月児の調査において、やはり「母乳」や「哺乳ビン」がう蝕発生要因として挙がってきた。さらに授乳行為をしている母親の意識を調べるため“授乳行為の必要性”を質問した結果、必要と思っていない母親が母乳群では20.6%、哺乳ビン群では35.0%認め、授乳行為をやめたくてもやめられない環境があることが推測された。

2. 研究の目的

本研究では、授乳行為の背景ならびに環境を調査し、乳歯のう蝕発生予防となる子どもの乳離れ（自立）を支援していくための方法を見出すことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)岐阜市の1歳6か月児歯科健康診査を利用し、量的ならびに質的な質問票調査を実施する。

(2)離乳完了期の母親に対し、フォーカスグループインタビューを実施する。

(3)全国の抽出保健センターに離乳支援の現状調査（質問票）を実施する。

4. 研究成果

・1歳6か月児健康診査に訪れた保護者に、質問票を配布し、返信（回収率80.0%）のあった1025名を分析した。量的質問から、授乳行為の背景について共分散構造分析により検討した。その結果、『授乳行為』の背景には、『育児不安（社会的活動の制限・否定的感情の認知）』が関わっており、『育児不安』は、『社会的支援（情緒的支援・手段的支援）』の影響を受けていた。一方で、『授乳行為』は、むら食いなどの『食事問題』に影響を与え、『食事問題』は、『子の気質』に影響を受けていた。『子の気質』は『育児不安』や『社会的支援』と関連があり、1歳6か月児での授乳は、それらの要因が複雑に関わって行われていることが示された（モデル適合度CFI=0.971、RMSEA=0.033）。次に自由記述の質的質問から、テキスト分析を行った。その結果、母乳や哺乳ビンを与える背景には、寝る時や夜中に、子どもがぐずり、与えることで子どもが落ち着き、母親が楽に思う気持ちがあった。そして母乳の場合、母親が子どもとのコミュニケーションや精神的な安心感を

大切に考えており、哺乳ビンの場合は、子どもがストローやコップが使えるようになるまで、栄養面を考えて与えていた。

・離乳完了期の母親に対し、フォーカスグループインタビューを実施し、ニーズ把握を試みた。この時期の母親にとって、自然な離乳がQOLの向上に繋がり、それを促すには、『夜泣き』『睡眠不足』『乳房のトラブル』『断乳への罪悪感』などの離乳行動を遮る要因を解決し、『身近なサポート』『離乳方法』『離乳の利点の認識』『授乳に代るスキンシップの方法』などの離乳行動をとらせる要因を積極的に支援していく必要があった。また歯科に対しては『歯を磨いてくれる』『両親学級』『フッ化物の情報提供』を望んでいた。

・行政での離乳支援の実態を調査した。対象は抽出保健センター618件に質問票を郵送し、返信（回収率68.2%）のあった、保健師、栄養士、歯科衛生士の計2525名である。

離乳完了時期の指導実施者は、母乳:69.2%、哺乳ビン:87.2%であった。その考慮点は、母乳で、保健師（栄養と虫歯予防）、栄養士（栄養と咀嚼発達）、歯科衛生士（虫歯予防と咀嚼発達）であった。哺乳ビンでは、保健師（虫歯予防と栄養）、栄養士（栄養と虫歯予防）、歯科衛生士（虫歯予防と咀嚼発達）であり、職種間で若干の違いはあるが、保健師が栄養士や歯科衛生士の考えを持ち合わせていた。一方、未指導者は、母乳で3職種ともスキンシップを重視していた。また非常勤は常勤に比べ、話合いが少なく、同・他職種間ともに指導法に違いを感じていた。離乳支援には、職種間や勤務体制間での見解の統一の必要性が示された。また、職種による指導の違いが認められたことから、歯磨剤使用の指導状況に違いがみられるかを分析した。子ども用歯磨剤は、齲蝕予防の観点から、近年、早期使用が望まれているが、飲み込みから早期使用を

避ける考えもある。分析の結果、保健センターでは、低年齢児(乳児)からの歯磨剤使用に消極的であることが認められ、指導者の属性・知識により指導状況は異なっていた。離乳指導を行わない場合、フッ化物の応用を勧めることは必要と思われる。しかし、歯磨剤指導と授乳指導との関連性は認められなかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計4件)

・岩田幸子、大橋たみえ、石津恵津子、他7名、保健センターにおける歯磨剤使用に対する指導状況、第60回日本口腔衛生学会総会、2011年10月予定(5月開催が震災のため延期)、日本大学松戸歯学部

・岩田幸子、大橋たみえ、石津恵津子、他10名、離乳支援(指導)に関する調査、第69回日本公衆衛生学会総会、2010年10月27日、東京国際フォーラム

・岩田幸子、石津恵津子、大橋たみえ、他7名、離乳行動に影響する授乳行為の背景分析ーフォーカスグループインタビュー調査、第68回日本公衆衛生学会総会、2009年10月23日、奈良県文化会館

・岩田幸子、石津恵津子、大橋たみえ、他7名、授乳継続に関わる背景因子についてのテキスト分析、第67回日本公衆衛生学会総会、2008年11月7日、福岡国際会議場